薬史レター

第 56 号

日本薬史学会　　JSHP　　2010 年 6 月

〒113-0032 東京都文京区弥生2-4-16　（財）学会誌刊行センター内 日本薬史学会事務局

TEL (03)3817-5821　　FAX (03)3817-5830　　URL *http://yakushi.umin.jp/*

第３回日本薬史学会・柴田フォーラム開催ご案内

日本薬史学会企画委員会

「薬史学会・柴田フォーラム」も、今年で３回目を迎えることになりました。

今回は星薬科大学で下記要領にて開催することになりました。幸いにして、同大学学長の中嶋暉躬先生からお話を賜ることになりました。なお、講演会など終了後、同大学の施設の一部を見学させていただくことになりましたので、併せてご案内申上げます。非会員の皆様もお誘いくださいますようお願い申上げます。

記

日　　時：2010 年 8 月 23 日(月)

会　　場：星薬科大学新星館 2F 208 番教室（〒 142-8501 東京都品川区荏原 2-4-41）

主　　催：日本薬史学会

会場案内：TEL 03-5498-5784（三澤教授室）

JR 山手線五反田駅―東急池上線戸越銀座駅―徒歩 8 分

JR 山手線目黒駅―東急目黒線武蔵小山駅―徒歩 12 分

地下鉄（都営浅草線）戸越駅―徒歩 10 分

（マップは次頁）

スケジュール

1．受付開始：星薬科大学新星館１階エントランスにて　13：30 ～

2．開会挨拶：山川浩司会長　14：00 ～ 14：10（新星館 2F 208 番教室）

3．講演講師：中嶋暉躬先生（星薬科大学学長）

演題（話題）:「生物の毒の研究史」 14：10 ～ 15：00（同 208 番教室）

座長：三澤美和（星薬科大学教授）

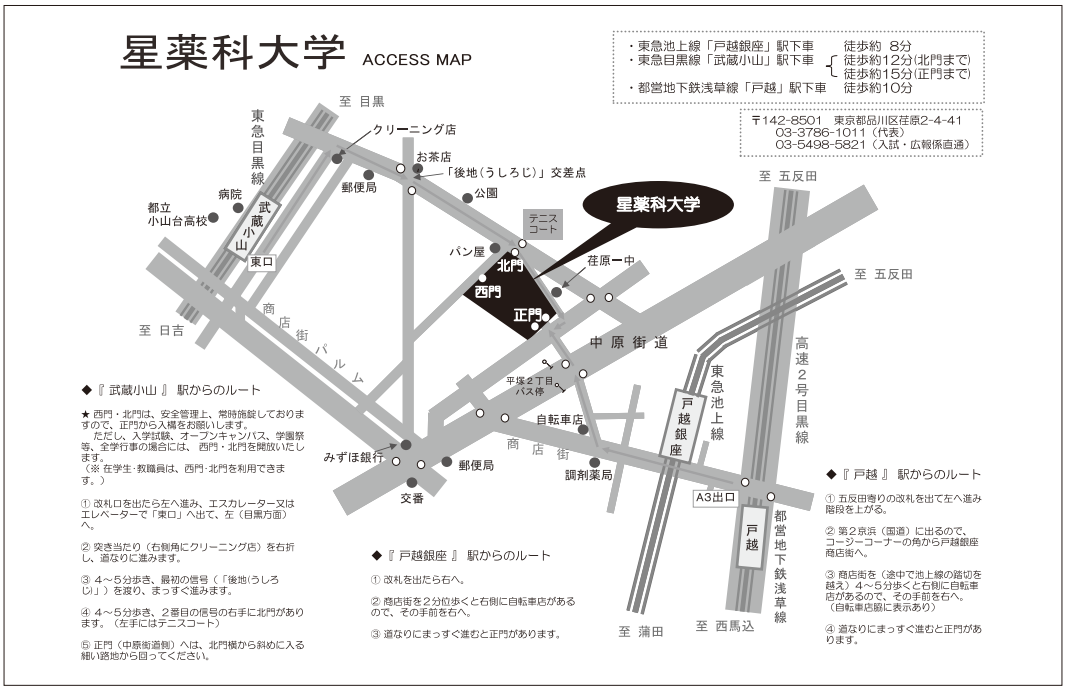
4．見学会：星薬科大学本館壁画、星一記念室、講堂、薬草園　15：10 ～ 16：00

付記　講演会・見学会は会費無料

5．懇親会：星薬科大学新星館 1F レストラン・ステラにて　16：10 ～ 18：00
（なお、懇親会費として、会費 3 千円 を当日お支払いいただきます。）

・**参加申込・問合先**：塩原仁子（企画委員：昭和大学薬学部）
ＴＥＬ：03-3784-8953　　FAX：03-3784-8959
e-mail：s.career@ofc.showa-u.ac.jp

・**申込締切**：2010 年 8 月 16 日（月）で締め切らせていただきます。



日本薬史学会 2010（平成 22）年度　理事・評議員会、総会報告（概要）

理事・評議員会

東京は前日よりの時ならぬ寒気団の南下で早朝は 41 年ぶりの遅い降雪に見舞われて、雪は止んでも冷え冷えとした 4 月 17 日（土）の 12 時 30 分より東京大学大学院薬学研究科総合研究棟 10 階の大会議室で開催した。平成 22 年 3 月末で役員の任期が終了したので、今年度より就任予定の評議員候補者を含めて 37 名が参集、山川会長の開会の挨拶に引き続き、総会の議事内容の項目を三澤理事が述べてから、津谷副会長が進行役となり、出席者全員が学会に対する意見などを発言して 13 時 40 分閉会。総会場へ移動。

総　会

2 階大講堂で宮本理事の司会により開催。出席者 47 名。
山川会長を議長に選出した後、三澤理事が 2009（平成 21）年度事業報告を説明し、次いで高橋理事による同年度の決算報告の説明があった後、雨宮監事代行より収支決算は適正、正確であると監査報告がなされた。（年度内に杉山茂監事が一身上の都合で退会されたので、雨宮昌男会員に監事代行を委嘱してきた。）

2010(平成22)年度事業計画を三澤理事、末廣理事が説明し、その予算案について高橋理事から説明があった。

次いで新役員人事の発表があった。新会長には山川浩司会長が留任し、新会長として挨拶の後、川瀬　清、山田光男両氏の長年にわたる学会への貢献に対して名誉会員への推薦が披露されて、推薦状の授与があり、両氏より受賞の挨拶があった。

学会の運営組織についても会長、副会長と8名の常任理事と雨宮監事により構成される常任理事会とその傘下にある総務委員会、財務・会員管理委員会、編集委員会、企画委員会、広報委員会、国際委員会による運営方式が提案された。そのほか、会則の一部変更、東海支部設立など総ての議案は全会一致で承認された。なお東海支部長には奥田　潤理事の就任が発表された。また今年度の年会の準備状況ついて海保年会長(東京理科大学薬学部)よりの報告があり、15時20分閉会。

公開講演会

会員外の来会者の姿も場内に目立つようになって、約60名が15時30分より17時40分まで二題の講演を熱心に聴講した。

1)「日本薬史学会創立から50年のあゆみ」
　　川瀬　清氏（日本薬史学会）

2)「麻薬を科学する―――モルヒネの移り変わり」
　　兼松　顕氏（九州大学名誉教授、前名城大学学長）

講演終了後、東京大学山上会館で恒例の懇親会が行われた。

日本薬史学会常任理事任期満了にあたって
― 木村雄四郎第2代会長と野上寿第3代会長の頃 ―

山田　光男
日本薬史学会名誉会員

このたび、本年2010年3月31日をもって薬史学会常任理事の任期が満了いたしましたので、これを機会に事務局担当を辞めさせて頂くことになりました。また光栄なことに、4月17日の日本薬史学会総会の場で、山川浩司会長より、名誉会員の推薦状をいただきました。1980年、木村雄四郎先生が会長の際に入会し事務局のお手伝いをしてから丁度30年になり、長い間の皆様のご指導、ご後援に厚くお礼申し上げます。

総会前に、薬学部10階会議室で開催された理事・評議員会で退任のあいさつとともに、当時のことなどを振り返り、また今後のあり方などについて考えていることを述べさせていただきました。そこでお話したことにいくらか秘話めいたことも追加し記録として残すことも今後の学会のさらなる発展を期するためには重要かなと考えました。

学会のwebの「日本薬史学会の沿革」(http://yakushi.umin.jp/history.htm）には歴代会長の写真と任期が収載されています。私は朝比奈泰彦初代会長（1954-1975）のあとを継いだ木村雄四郎第2代会長の時期から学会に関係しました。ここでは、木村会長と野上寿第3代会長の時期を主に記すこととしました。

１. 木村雄四郎第２代会長（1976 ～ 1985）

私が薬史学会に入会したのは 1980 年開催の日本薬学会 100 年会の頃でした。当時、日本薬史学会は日本薬学会の分科会として運営されておりました。1980 年、東大教養学部講堂での日本薬学会年会開催の折に、現在ここにおられる石坂哲夫、高橋文、辰野美紀各先生かたの研究発表を伺い、入会することにいたしました。私は中学時代から歴史が好きだったので当時、お茶の水の日本大学・薬学部で薬史学会の会員管理、会費徴収など学会運営の実務を担当されていた瀧戸道夫先生（現名誉会員）を訪ねて入会手続きをした次第です。

当時の本会は、木村会長のもとに、吉井千代田先生が常任幹事という役職名で運営を担当、長沢元夫先生（当時・東京理科大教授）が薬史学雑誌の編集を担当されておりました。また根本曾代子、伊藤和洋両先生が相談役のような立場で助言しておられました。理事、評議員などという制度もなく歴史好きな老人仲好しクラブなどと陰で言われ、会員も 100 名までいかなかったと記憶しています。

たまたま私が入会した時が本会創立 30 周年を控えて薬史学雑誌記念号を編集する時期になっていたので、欧米諸外国の薬史関連学会から祝辞を頂くプロジェクト担当を木村会長から指示されました。私は当時、日本薬局方･医薬品鑑別試験法変遷史（J.P.1 ～ 10）を勉強（学位論文テーマ）したことで、日本薬局方（J.P.）100 年史編集を担当されていた江本龍雄先生（日本公定書協会）のご指導を受けておりました。

私は早速、江本先生の協力で、J.P.100 年記念史に祝辞を頂く欧米薬剤師会などを通じて、薬史学会 30 年記念誌への祝辞入手を木村会長名でお願いし、その入手に成功しました。薬史学雑誌創立 30 周年記念号に、アメリカ、オーストリア、カナダ、ドイツ、フランス、オランダ、スエーデン、スイスなどからの祝辞が掲載されております。その後の 40 年記念誌、50 年記念誌にもひき継がれておりますが、江本先生のお陰です。またこれが、後の医薬史跡の欧州訪問の旅、国際薬史学会入会などにもつながったと思います。これが縁となって、江本先生が当会に入会され、野上会長時代に、会員管理、経理を担当されるようになりました。木村会長の前任（仮）の清水藤太郎先生は海外学会との交流が深く、1952 年に国際薬史アカデミーから日本で初めての会員として推薦されていることなどを考えますと、木村先生は清水先生の意思を引き継いだともいえましょう。

２. 木村会長から野上会長へ（1985.10 ～ 1986.3）

1980 年以前から､｢日本薬学会発足の歴史｣について根本曾代子､宗田一両氏の間に意見の相違があって論争が続いており、その意見発表の場に「薬史学雑誌」が用いられました。当時、編集担当の吉井千代田常任幹事は、大阪居住の宗田先生よりも身近の根本先生の論文を優先して掲載したので、宗田先生から木村会長あてに文書で強い抗議文がきました。

木村先生は入会間もない私を自宅に呼び、「責任問題解決のために吉井先生だけを辞めさせる訳に行かないから自分も会長職を辞任するので次期会長を決めたい」とのことでした。

朝比奈初代会長の後は清水藤太郎先生が会長を継ぐはずだったのですが清水先生が急逝されたため木村先生が第２代目の会長になられたのでした。木村先生は東大薬学から次期会長を迎えたいとの意向だったので、大阪大学病院薬局長から東大医学部薬学科教授兼病院薬局長（現在名は薬剤部長）に戻られた東大生薬学教室出身の野上寿名誉教授を推薦した処、同じ生薬学会の知己ということで、非常に喜ばれ即決されました。私は、野上先生とは原稿依頼などで以前から自宅訪問の交流などがあったので、薬史学会会長就任依頼の木村先生の意向を野上先生にお伝えしたところ、快諾され、私を連れて吉祥寺の木村先生の自宅を訪問して「日本薬史学会の発展と近代化を引き受けます」と挨拶されました。

３. 野上寿第３代会長（1986 ～ 1990）

薬史学会運営について、野上寿会長の相談相手となったのは、江本龍雄、川瀬清、私の３人でした。杉並の先生の自宅･応接間で会員数 100 名以下（当時）の小さな学会の近代化案の作成に着手しました。その概要は以下の通りです。

⑴　朝比奈先生のお陰で、少人数会員で発足したにも関わらず日本薬学会分科会にして頂いているので早く会員をふやし、将来は学術会議への登録を目指す。その目標達成のため、評議員制度を制定して、全国大学薬学部教官に評議員をお願いして会の知名度向上と薬学生の入会を勧誘して頂く。

⑵　評議員に薬学会で研究発表をして頂き、同時にその地で評議員会を開催して会の全国組織化をはかる。これに基づいて、初めての評議員会は京都、次に名古屋で開催しました（瀧戸先生と私が当日の弁当の手配などに追われた記憶があります）。

⑶　外部および評議員などに対する広報活動として、「薬史学会通信」を発行する。

⑷　野上先生がハワイで開催の日米合同薬剤学会の経験を生かして、清水藤太郎先生の海外薬史学会との交流以後、途絶えていた関係の復活・強化をはかる。

⑸　国内各地に、順次、支部を設立して薬史学研究の普及をはかる。

この具体的な第一歩として古くから薬の歴史の大阪に最初の支部を作ることになりました。大阪は野上会長が阪大病院薬局長をされた土地だったので、阪大薬学部の米田該典先生が 1990 年 10 月 13 日に西部支部設立講演会を企画され、山田久雄評議員の尽力で大日本製薬株式会社会議室で開催することになりました。野上会長は、大阪行きの体調検査の目的で慶応大学病院に検査入院され、突然の医療事故で 10 日に急逝されました。このため、設立講演会は私が野上先生の原稿を代読して西部支部の設立を発表した次第です。

今日のような形式で理事・評議員会が開催されるようになった野上寿先生の５年弱の短い会長時代でしたが、現在の薬史学会の基礎を確立した思い出をお話して、私のご挨拶といたします。

４．野上会長から柴田会長へ

野上先生が 1990 年 10 月 10 日に急逝されたので、木村先生の意向と同じく東大生薬教室出身の方を会長に迎えようと川瀬先生（海軍見習薬剤官から復員後、東大・生薬教室研究生）と相談、野島庄七東大名誉教授の助言も伺い、日本薬学の祖、柴田承桂先生の孫の承二先生に第四代会長をお願いした次第です。1991 年４月１日に柴田先生が第４代会長に就任されました。柴田会長の任期期間中に、それまで理事？であった東京理科大学の長沢元夫先生の後任として理事に山川浩司先生が就任され、その後 2005 年から会長に就任されました。

おわりに：今後のお願い

以上の会長の人事をめぐる物語を読まれると、若い方々は奇異に感じられるかもしれません。なんと非民主的であろうと思われる方もおられるでしょう。しかし約 300 人の小さい学会を発展させるにはこのような方法もこれまでは必要だったのです。今後は違った方法もあるかもしれません。

現在の薬史学会の至急検討しなければいけない課題は、学会の若返りであります。30 年前にいわれた「老人のなかよし学会」などに戻らないように若い会員を増やす努力をしてください。組織のトップは、常に自分の後継者を決めるのが最大の義務とされます。学会も同様で、会長は常に後任会長を考えて会の運営を考えることが必要です。現在の薬史学会の会則には役員の重任期間の定めがありませんが、２期あるいは３期までと期限を決めるのが一つの課題かもしれません。いずれにしても、学会の若返りを常に念頭においてその発展を頑張って下ください。

日本薬史学会 2010 年会（東京）の概要
研究発表演題の募集

日　　時：2010 年 11 月 13 日（土）9：30 ～
年 会 長：海保　房夫（東京理科大学薬学部准教授）
会　　場：東京理科大学神楽坂校舎 1 号館 17 階　講堂（新宿区神楽坂 1-3）
主　　催：日本薬史学会

一般講演：口頭発表（1 演題 20 分；発表・質疑応答を含む）
ポスター発表

申込方法：FAX または E-mail で下記の必要事項を記入し、年会事務局にお送り下さい。

1. FAX の場合：「日本薬史学会 2010 年会申込書」（別紙の様式）に必要事項を記入して下さい。
   （1）発表演題
   （2）発表者並びに共同研究者全員の氏名（発表者に○）と所属
   （3）連絡先・氏名・所属・住所・電話番号・FAX 番号、
   E-mail（勤務先の場合所属を明記）
2. E-mail の場合：ファイル添付形式にせず、メール本文に別紙の様式の必要事項を記入し送信して下さい。

演題申込み締切り；平成 22 年 7 月 20 日（火）（必着）
要旨提出の締切り；平成 22 年 9 月 11 日（土）（必着）
発表者は、発表申込時点で日本薬史学会会員に限ります。

年会参加申込：E-mail または　FAX

・FAX の場合は「日本薬史学会 2010 年会（東京）参加申込書」（別紙の様式）の項目をご記入の上、お送りください。
・E-mail の場合は、添付ファイル形式にせず、メール本文に、別紙の様式の項目に従って記載し、送信して下さい。
・**事前参加申し込みにつきましては、10 月 30 日（土）**をもちまして締め切らせて頂き、以降の参加申し込みにつきましては、年会当日とさせて頂きます。

年会参加費：**事前予約した会員の方：3,000 円**
年会当日申し込みの会員の方：4,000 円
非会員　5,000 円
学　生　1,000 円

懇 親 会：18：00 から 20：00 まで
東京理科大学神楽坂校舎 1 号館 17 階　大会議室
懇親会費：5,000 円、学生 2,000 円

※ 参加費並びに懇親会費は、当日会場受付にて徴収させて頂きます。

年会事務局：連絡先；東京理科大学薬学部　　担当；砂金信義
〒 278-8510　千葉県野田市山崎 2641
TEL：04-7121-3651（直）　FAX：04-7121-3651
E-mail: sunagane@rs.noda.tus.ac.jp

様式

日本薬史学会2010年会（東京）参加および講演発表申込書

フリガナ			
氏　名			
所　属			
住　所	〒		
TEL		FAX	
E-mail			

講演発表申込；　する　　しない　　（希望を〇で囲んで下さい）
演題（仮題）；

氏名（所属）；
共同研究者を含む発表者に〇を付けて下さい

希望発表形式；　口頭発表　　ポスター　　（希望を〇で囲んで下さい）
（注　会員のみ発表者になれます、連名はこの限りではありません）

参加費（〇で囲んで下さい）

1．日本薬史学会年会；
　参加費　　会員；3,000円、 非会員；5,000円、 学生；1,000円

2．懇親会費　　会員・非会員；5,000円、 学生；2,000円

合計金額　　円
会費は当日会場にて受け付けます

申込書の送付先；東京理科大学薬学部　　担当；砂金　信義
〒278-8510　千葉県野田市山崎2641
TEL；04-7121-3651　FAX；04-7121-3651　E-mail；sunagane@rs.noda.tus.ac.jp

日本薬史学会東海支部設立総会と特別記念講演会報告

日本薬史学会東海支部（事務局）

日本薬史学会東海地区では、平成22年1月9日（土）名古屋駅前名城大学サテライトにおいて、名城大学名誉教授（薬）奥田潤氏の呼びかけで薬史学会東海支部設立について発起人会（出席者8名）を開催した。

種々討議の結果、支部設立について全員の賛成を得た。東海地区の本会個人会員は24名であり、発起人会に参加できなかった会員に支部設立について賛否を問うたところ、14名から賛成の返事をいただいた。

そこで北海道支部の会則を参考に東海支部会則案を発起人会で作成した。

3月22日（月曜日・振替休日）に支部設立総会を午後1時より名城大学サテライトで開催し、会員13名の出席を得て、支部長に奥田潤氏を選出し、会員の自己紹介の後、支部会則案と役員案を承認した。午後1時30分より多目的室で岐阜薬科大学名誉教授水野瑞夫先生による東海支部設立特別記念講演「伊吹山と飯沼慾斎」を行った。伊吹山は岐阜県西部にある標高1377メートルの山で日本一の薬草の宝庫で、水野先生は生薬学者として薬草の特色をカラーのパワーポイントを用いて解説され、ついで多年研究された大垣の漢方医飯沼慾斎について、医学、本草学、植物学の研究と化学者としての活躍をご説明いただき、出席会員30名に深い感銘を与え、東海支部設立に花を添えていただいた。

講演後、祝賀懇親会に移り、斎藤元護北海道支部長からの祝電が奥田支部長より披露され、ワインで乾杯し、午後3時30分閉会した。なお次期支部会は12月5日（日）内藤記念くすり博物館で行うことになった。

水野先生と奥田先生のディスカッション

〔書評〕

西川　隆　著「くすりの社会誌」― 人物と時事で読む 33 話 ―
A5 版　313 頁　2010 年 2 月刊、3400 円（薬事日報社）

本会の西川評議員が「くすりの社会誌」と題して、東京都薬剤師会誌に平成 17 年 9 月より平成 20 年 3 月まで 30 回にわたり連載された。都薬誌に連載中から多くの人々に読まれ、単行本の出版が望まれていた。この連載にかなり加筆されて本書が刊行され、より多くの人々に読まれるようになったことは喜ばしい。

明治時代初期の戊辰戦争で医師として敵味方を差別せずに治療に活躍した、この英医ウイリスの話から始められる。明治新政府はウイリスに病院経営を委嘱するが、ウイリスは欧米の医療に欠かせない薬剤師を確保することが出来ず辞退する。明治政府が採択したのは英仏の臨床重視の医学ではなくドイツの研究室医学であった。明治の初め漢方医術から西洋医学への大転換で重視されたのは西洋医学であって西洋医療ではなかった。そのための医療における医薬分業は理解されなかった。一世紀を経て今日までに医薬分業はようやく 50%を超えるまでになった。

本書の構成は明治時代（1 ～ 6)、大正時代（7 ～ 9)、昭和時代（戦前～戦中;10 ～ 14)、昭和時代（戦後　15 ～ 30)、平成時代（31 ～ 33）から構成されている〔(　) の数字は本書に記述された話題番号を示す〕。本書に見られる 33 の話題は日本の医療における薬学と薬剤師の葛藤であったとも読み取ることができる。この中で薬学が文化勲章の輝かしい成果を誇ったのは朝比奈泰彦（12)、近藤平三郎（17)、落合英二（21)、津田恭介（28）の天然物有機化学の研究成果であった。

本書には医薬分業を巡って苦闘する多数の話題（4、5、8、9、16、18、26、30）が取り上げられている。また薬害や環境問題に関係する話題（22、27、31）や医薬品産業に関係した話題（6、12、14、15、19、25、29)、最終章（33）は念願の薬学六年制が決定した日の話題が取り上げられている。雑誌の連載時の写真や図版も一新されて見やすく読みやすい本に仕上げられている。本会の方々に広く読まれてほしい図書として推奨する。（山川浩司）

〔書評〕

百島裕貴著　ペニシリンはクシャミが生んだ大発見
― 医学おもしろ物語 25 話 ―
平凡社新書、239 頁、740 円（平凡社）

本書は今年の 2 月に平凡社新書 10 周年の一冊として刊行された。著者の百島氏は慶応義塾大学医学部の放射線科講師の専門医である。

本書の題名はフロリーによるペニシリンの再発見の話（21 話）から付けられている。この新書は第一部の診断編に、体温計、聴診器、X 線、胃カメラ、MRI などの 13 話、第二部の治療編には、輸血、種痘、麻酔薬・通仙散、消毒法、セックス・カウンセリング、胃潰瘍の治療（ピロリ菌の発見）など（14−25 話）の 12 話が記述され、多数の図や写真も盛り込まれていて目からウロコのような話が豊富である。また随所に「医学マメ知識」のコラム欄には、コッホとパスツールは犬猿の仲、遺伝子診断の将来、日本人が発見していたピロリ菌などの話題が記述されている。

巻末には、医学史上の主な出来事と世界史・日本史対応年表、各項目の主要参考文献なども挙げられている。会員の方々に興味を持っていただけると思い、推奨する。（山川浩司）

平成 22 年度 北海道支部 総会・特別講演会・研究発表会(報告)

第 57 回北海道薬学大会が平成 22 年 5 月 8・9 日の両日、札幌コンベンションセンターに於いて開催され、北海道薬剤師会、北海道病院薬剤師会を始めとする薬剤師の活躍する 10 団体が参加し（参加者：2290 名)、それぞれの総会・講演会・諸会議などの開催と共に、日頃の業務・研究の成果などが報告された。当支部の関わった部分をご紹介する。

大会の皮切りは大会特別講演会、望月正隆先生（薬学教育協議会代表理事；東京理科大学教授）による「新しい薬学教育の展望、医療人としての薬学人」と題する時宜を得た内容で始まった。出席者は 6 年制薬学教育 5 年目を迎えた今、ここに至る迄の経緯や臨床実習を迎える今年度の現況を充分理解したことであろう。特別講演は他にもあり、参加 10 団体の其々が開く 8 件の講演が並ぶ。あれも聴きたい、これも聴いてみたい講演のオンパレードであったが、時間のやりくりで聴けない講演も多く、もったいないと感じた。当支部からは、千葉博志先生（琴似調剤薬局：札幌市）による落語「時そば」を題材にした「笑いと健康」の講演会を用意した。一般市民にも開放したためか、超満員の入りであった。

当支部の総会では、前年度事業・会計報告、支部発足 5 周年記念事業の報告に次いで平成 22−23 年度役員の改選、平成 22 年度事業計画・予算案が提示され、いずれも承認された。今年度の主な事業としては、北海道薬学大会と北海道医史学研究との合同学術集会（10 月 2 日）が待ち構えている。

役員改選では常任幹事が数名増員された程度の変更で、20−21 年度役員が殆ど留任となった。支部長には 3 期 6 年間を取り仕切ってきた齋藤元護先生の続投が提起され、満場一致で承認された。就任に当って齋藤支部長は、支部の発足以来、組織造りに邁進して来たが業務も定着し落ち着いてきたので、今後は研究面での成果を挙げよう、との呼び掛けがあり、一同、支部長の若さ・元気・情熱を心強く認識した。

さて、その研究であるが、当支部からの報告は次の 2 件であった。木村らの「後志（しりべし）の薬史（Ⅰ）昭和初期の医・薬業の現状」および八木らの「薬学における温泉研究の歴史（X）『日本鉱泉誌』に観る『温泉療法学』の原点」。本大会では、若干の例外を除き研究報告は殆どポスター形式で行われた。つい先年まではスライドで行っていたが、ポスターに切り替えた結果、各団体からの演題数が回を重ねるごとに増え、今では大きな会場を用意せねばならなくなったのは喜ばしい傾向と言うべきだろう？以上、第 57 回北海道薬学大会の概要をまとめた。

平成 22 年 5 月 22 日

北海道支部・常任幹事　　関 川　彬